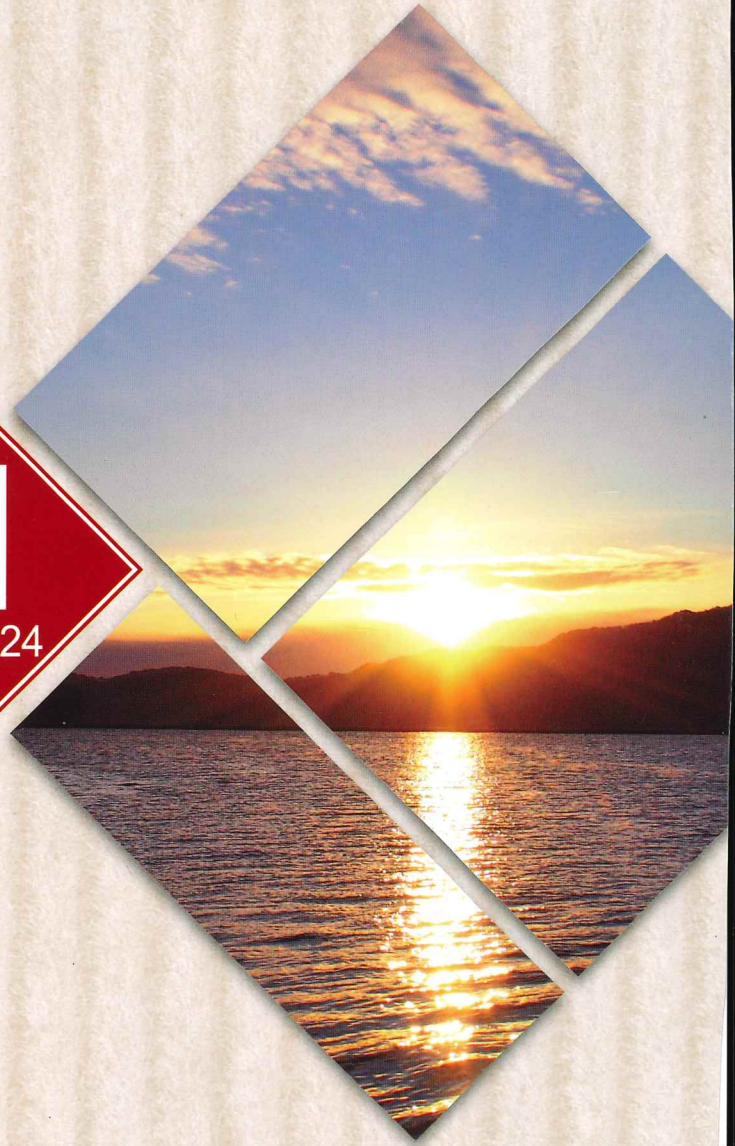


書道研究誌

書道の光

1
2024



Vol.665
宮城野書道会



敬頌新禧

皆様方のご健勝と

ご多幸をお祈り申しあげます

令和六年 歳旦

宮城野書道会

会長 佐藤象雲

役員一同

はんようにおくるし
贈范曄詩 陸凱
りくがい

折梅逢 驛使 梅を折りて 驛使に逢い

寄与 隴頭人 隴頭の人に 寄与す

江南 無有所 江南有る所無し

聊贈 一枝春 聊か一枝の春を贈る

たまたま 驛継ぎの使者に逢ったので、梅の花を折って君にことづけて贈った。
隴山のほとりにいる君のもとに送り届けよう。

私の居る長江の南の地にはこれといった物もないけれど、
ともあれこの一枝の咲きこぼれる春を春の遅い北地の君に贈りたいのだ。

《驛使》 官文書を伝達する人、または宿場飛脚。

《寄与》 贈り与える。

《隴頭》 隴山のほとり。

《聊》 ひとまず。ともあれ。

東晋が滅びてから(四二〇)、随王朝の建国(五八二)までの約百六十年間は、国が南北に分かれて興亡を繰り返して、南北朝時代と呼ばれます。陸凱は南北朝時代の南朝宋(四二〇〜四七九)の人で河北出身ということですが、生卒など詳しい伝記は残っていません。この詩は陸凱が北伐の部隊に従って長安に遠征中の范曄に寄せた詩といわれます。范曄(三九八〜四四六)は会稽郡山陰県(現在の浙江省紹興市)生まれの政治家で、宋の文帝に仕えて『後漢書』の著者として知られています。

「江南」の呼び方は時代によって地域が異なりますが、一般的には中国長江下流部の南方にある江蘇省南部から浙江省北部にかけての地域です。ここでは南朝の都があった健康(南京)を指し、「隴頭」は隴山のほとりの意味で隴山は長安の西方にある山の名で、これによって長安の代称として使います。

梅はまだ春の浅い時期に真つ先に咲く花で、このことにより「花魁(花の魁)」とも言われます。陸凱は咲き開いたひと枝の梅を「一枝の春」と表現しています。早春の息吹を見事に活写した表現です。

明の唐汝諤の古詩解では、范曄は江南の人で、陸凱は河北の人で長安にいたので、陸凱から范曄に梅の花を贈るのはおかしいと言いますが、中国では官吏になると一所にとどまっていることの方が稀です。江南生まれの范曄にとって春にさきかけて咲く梅の光景が故郷の景色であるからこそ、異郷の地で北伐の部隊に向かう友人のために、陸凱は一枝の梅を贈ったと思います。

武田信玄はこの陸凱詩「贈范曄」を踏まえた詩「新正口號」を詠んでいますので、参考まで掲載します。

淑氣未だ融けず 春尚ほ遅し

穏やかな陽気には程遠く春の訪れは何時にならう、

霜辛雪苦 豈に詩を言はんや

霜や雪に苦しめられているなかでどうして詩を作る気になどなるだろう。此情 愧づらくは東風に笑はれんことを

そんな野暮な心情は春風に笑われてしまうから、

吟断せん 江南の梅一枝

先ずは江南一枝の梅でも詠おうか。

参考文献：漢詩選「古詩源(下)」(集英社)・漢詩の事典(大修館書店)

詩家の清景は新春に在り 柳は嫩く 鶯黄 色未だ句のわず 若し上林の花の錦に似るを待たば 門を出づるは皆是れ花を看るの人

詩家清景は新春に在り
柳嫩く鶯黄 色未だ句のわず
若し上林の花の錦に似るを待たば
門を出づるは皆是れ花を看るの人

《大意》 詩人の愛する清らかな景色は、何といつても新春にある。柳はわかく、鶯鳥のひなの毛のような黄色で、まだ青い色のついていない時期だ。もし上林苑の花が錦のように爛漫と咲きにおうころになったら、門を出るのはみな花見に行く人ばかりになってしまう。
(楊巨源詩・城東の早春)

歳去つて愁年を換え 春来たつて物色 鮮やかなり

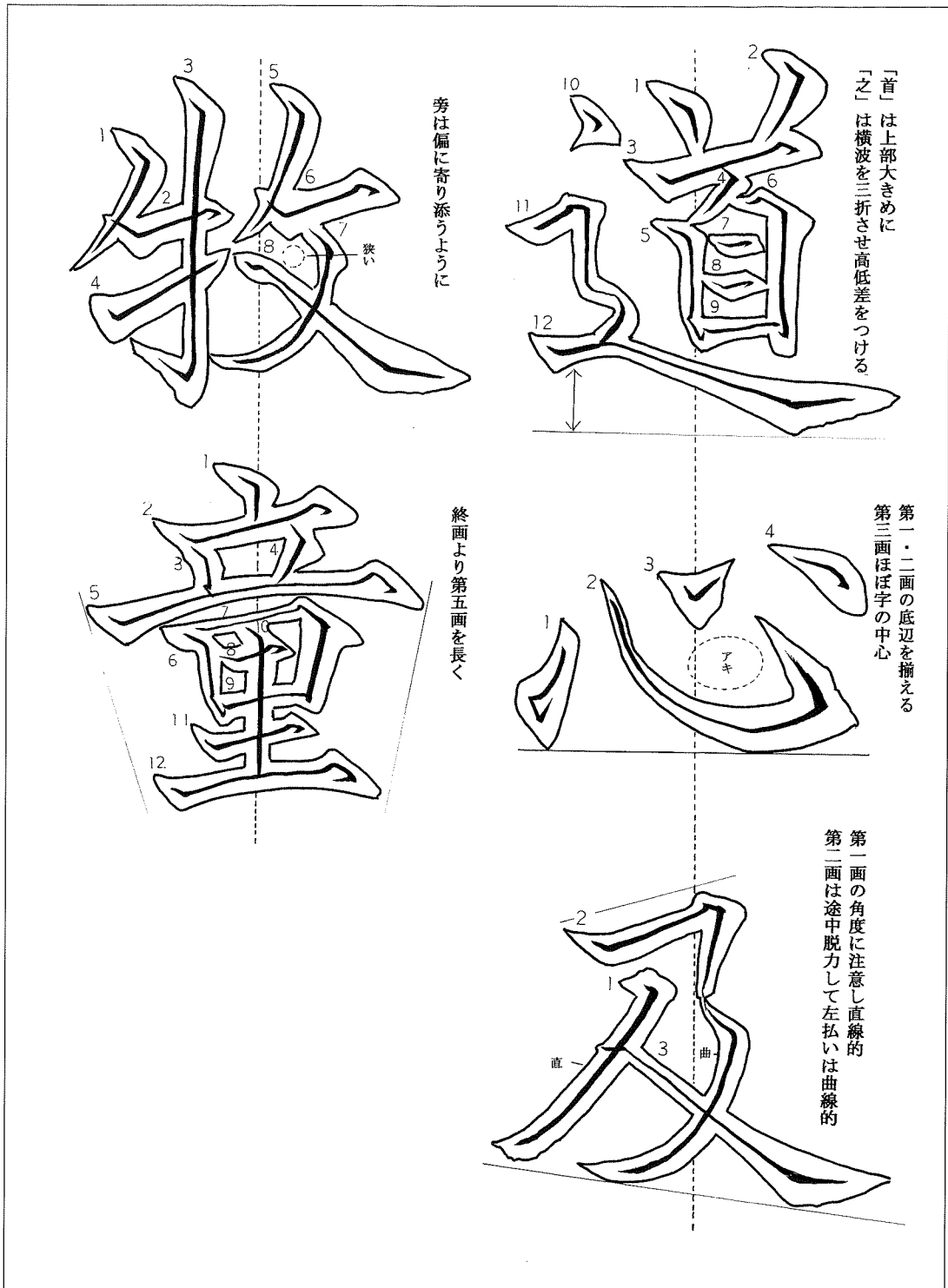
歳去つて愁年を換え 春来たつて物色 鮮やかなり

《大意》 一年は過ぎ去つて、あの愁わしい年はここに交替し、新しい春を迎えて物はみな色鮮やかである。(寒山詩句)

読み
道心
牧童に及び
(仏心の感化は牧童にまで及び)

牧童
道心
及

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について
 規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
 ・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
 ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」

(後半)

朝梵林未曙

朝梵 林 未だ曙けず

夜禪山更寂

夜禪 山 更に寂たり

道心及牧童

道心 牧童に及び

世事問樵客

世事 樵客に問ふ

暝宿長林下

暝に宿る 長林の下

焚香臥瑤席

香を焚きて 瑤席に臥す

澗芳襲人衣

澗芳 人衣を襲ひ

山月映石壁

山月 石壁に映ず

再尋畏迷誤

再び尋ぬるに迷誤を畏れたれば

明發更登歴

明發 更に登歴せん

笑謝桃源人

笑ひて謝す 桃源の人

花紅復來觀

花の紅なるとき 復た來りて觀はん

行書

草書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

道心及

牧童

道心及

牧童

隸書

次号課題

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

道心及

牧童

世事問

樵客

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部		順位		氏名	
<p>くればたけの根岸の里や</p>					
<p>松飾り</p>					

正岡子規

和泉溪石先生書



佐藤象雲書

音

フシヤリヨウガン
ケイキンゲンシヨウ

略解

呂布は弓の名人、宜遼ははじき弓の妙手。
稽康は琴の名人、阮嘯は詩吟の名人。



橋梁断絶し、子午（谷の旧道に再びよる）

■石門頌せきもんしょう（後漢・西暦一四八年）の臨書 (11)

象雲臨

『橋梁断絶子午』

石門頌が出来た当時は、漢隸の全盛期に入る時期です。有名な漢隸碑を掲げれば「禮器碑（一五六）」・「史晨碑（一六九）」・「西狭碑（一七一）」そして「曹全碑（一八五）」・「張遷碑（一八六）」など多くの八分隸の碑が建てられ、そして二〇五年に曹操による「立碑の禁」令が出されます。碑の建立に多大な費用を要するため贅沢を戒めるとともに豪族の力を削ぐためといわれます。

今月の課題は、「西光の暴虐により斜谷道の橋は断絶して、子午谷の旧道を再び使うこととなった。」という一節の六文字です。前記の諸碑の多くが備える整齊、典雅といった気風とは違い、暢びやかで自由闊達さがあり、また樂趣を感じさせます。今月の六文字はその典型的な結体で、偏旁からなる字は偏と旁の間がゆったりとして波筆も厳しさがなくゆったりとして「寛綽」という言葉がピッタリとあてはまります。

「橋」偏旁の位置取りが面白い。
「断」二つの糸を縦線で分割している珍しい結体。

「絶」偏旁間が広くさらに下部が暢びやか。

橋梁断絶
色木
子午

山 人 月 日

珠 露 雨

仙 露 明 珠

仙露明珠

象 雲 臨

■王羲之・集字聖教序(唐・西暦六七二年)の臨書 (25)

『仙露明珠』

王羲之の書を異常なほど愛した太宗はその取集に執念を燃やし、二千数百点ともいわれるコレクシオンはすべて、太宗の墓に陪葬され、真筆はこの世から姿を消しました。私たちが現在王羲之の書として学んでいるものは、すべて複製です。

一口に複製といっても様々です。一番多くの種類があるものは、後世の書家による臨書作品ですが、これは書家の主観的な目を通して作られているためバラつきがあり王羲之の筆跡と全く同じというわけではありません。つぎに本碑のように、王羲之の真蹟から写し取ったとされる拓本です。さらに石に彫り、それを紙に刷るという工程が加わりますので、これも原作から遠ざかれます。そしていちばん真の姿を伝えると思われるのが双鉤填墨です。作品の上に薄紙を敷き、細い筆で文字の輪郭をとって、その内側を丁寧に墨で填めていきます。これは一流の職人であれば、真蹟と見紛うほど精巧な複製も可能です。その真の王羲之書の姿を伝えるといわれるものが「初月帖」や「姨母帖」と言われています。王羲之の傑作と一般にいわれる国を憂いて書いたとされる「喪亂帖」は唐時代の好みで双鉤填墨に加味されているという説もあります。

さて今回の「仙露明珠」は集字の拓本です。真蹟より一段劣るとも言えますが、集字聖教序は王羲之書法の糸口を見つけるための対象としては大変有益な古典です。